

第1章 東広島市の概要

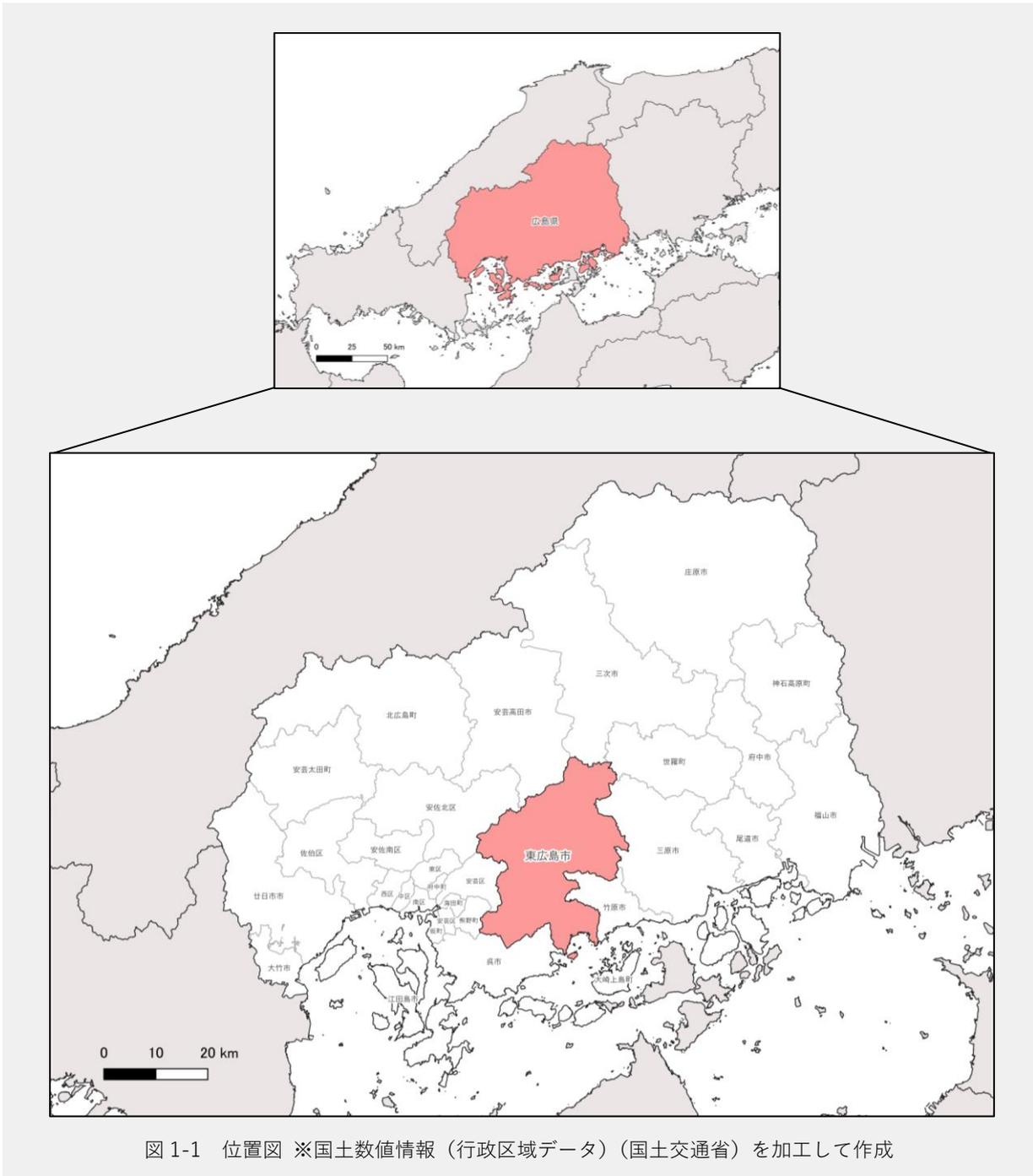
第1章 東広島市の概要

1. 自然的・地理的環境

(1) 位置

本市は、東は竹原市と三原市、北は世羅町・三次市・安芸高田市、西は広島市と熊野町、南は呉市と接しており、広島県における県央の中心都市に位置付けられます。

市域は東西 29.42km、南北 39.99km に広がり、面積は 635.16 km²で広島県の約 7.5%を占めています。



(2) 自然的環境

● 地形

本市は周囲を標高 400～500m の山々に囲まれた標高 200m ほどの盆地状の地形が大部分を占め、南西部を中心に比較的平坦地に恵まれています。本市の最高点は鷹巣山（標高 922m、福富町）です。^{たかのすやま}

南東部は瀬戸内海に面しており、沿岸部には小規模な平坦地が広がり、三津湾（安芸津町）には大芝島等の島しょがあります。

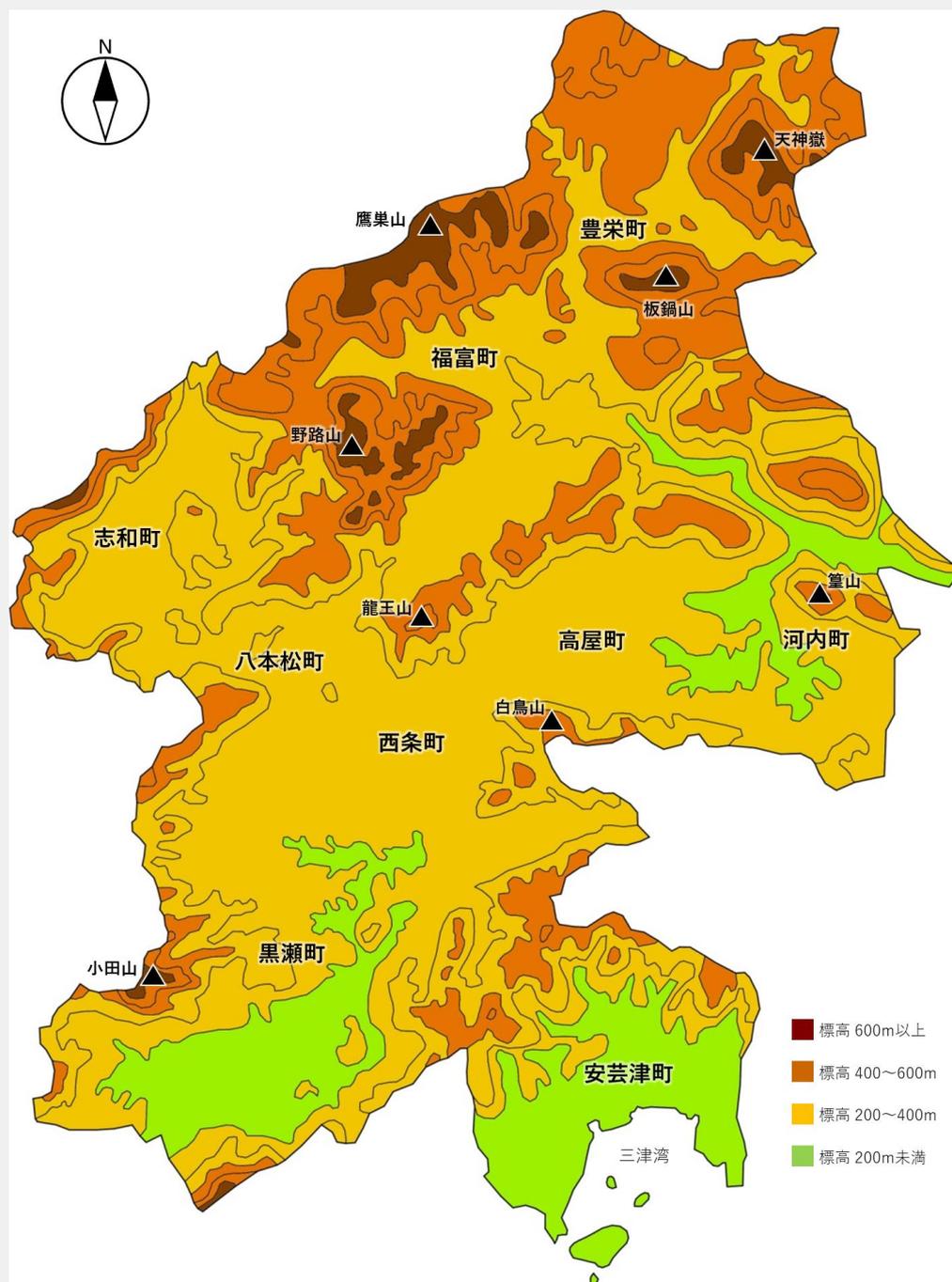


図 1-2 東広島市の地勢図

● 地質

本市の中央部は^{ひろしまか こうがん}広島花崗岩が優位な地質です。広島花崗岩は風化・浸食しやすく、その風化した土はいわゆる「^{まきつち}真砂土」と呼ばれており、広島県内に広く分布しています。西条町、高屋町、黒瀬町にまたがる西条盆地は、この広島花崗岩体が風化・^{さくはく}削剥されて生じた浸食盆地です。

また、盆地の中心部には、広島花崗岩の岩盤の上に、砂層と粘土層が交互に積み重なった西条層と呼ばれる厚い堆積層があります。その地層から寒冷植物の化石群が発見されており、更新世ミンデル氷期（約40～50万年前）以前に形成されたと考えられています。

これに対し、北部と南部は^{たかた りゅうもんがん}高田流紋岩が広範囲に見られます。流紋岩は浸食に対して耐性が強く、浸食に弱い花崗岩との境界付近では岩が露出した険しい地形を見ることができます。

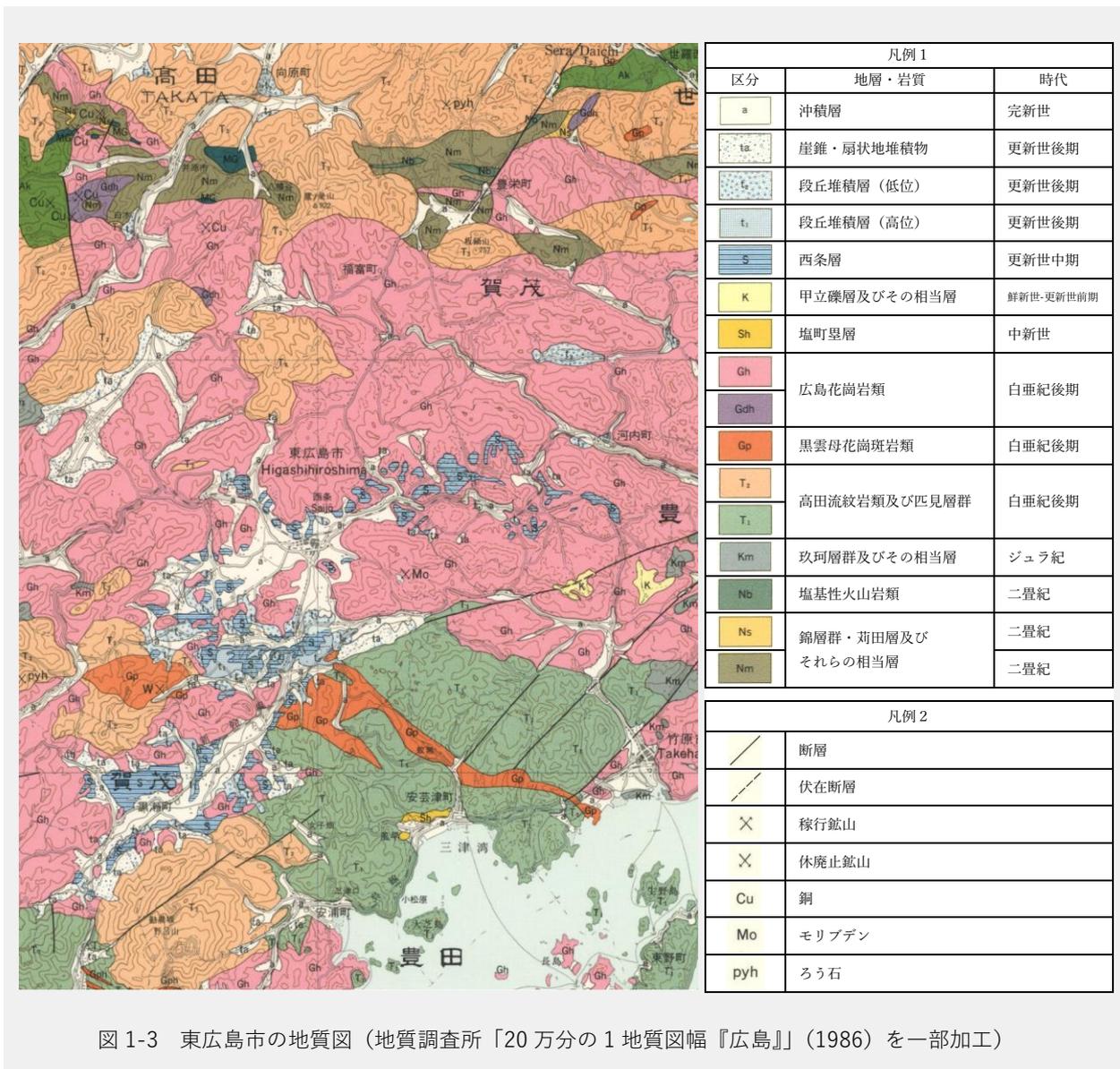
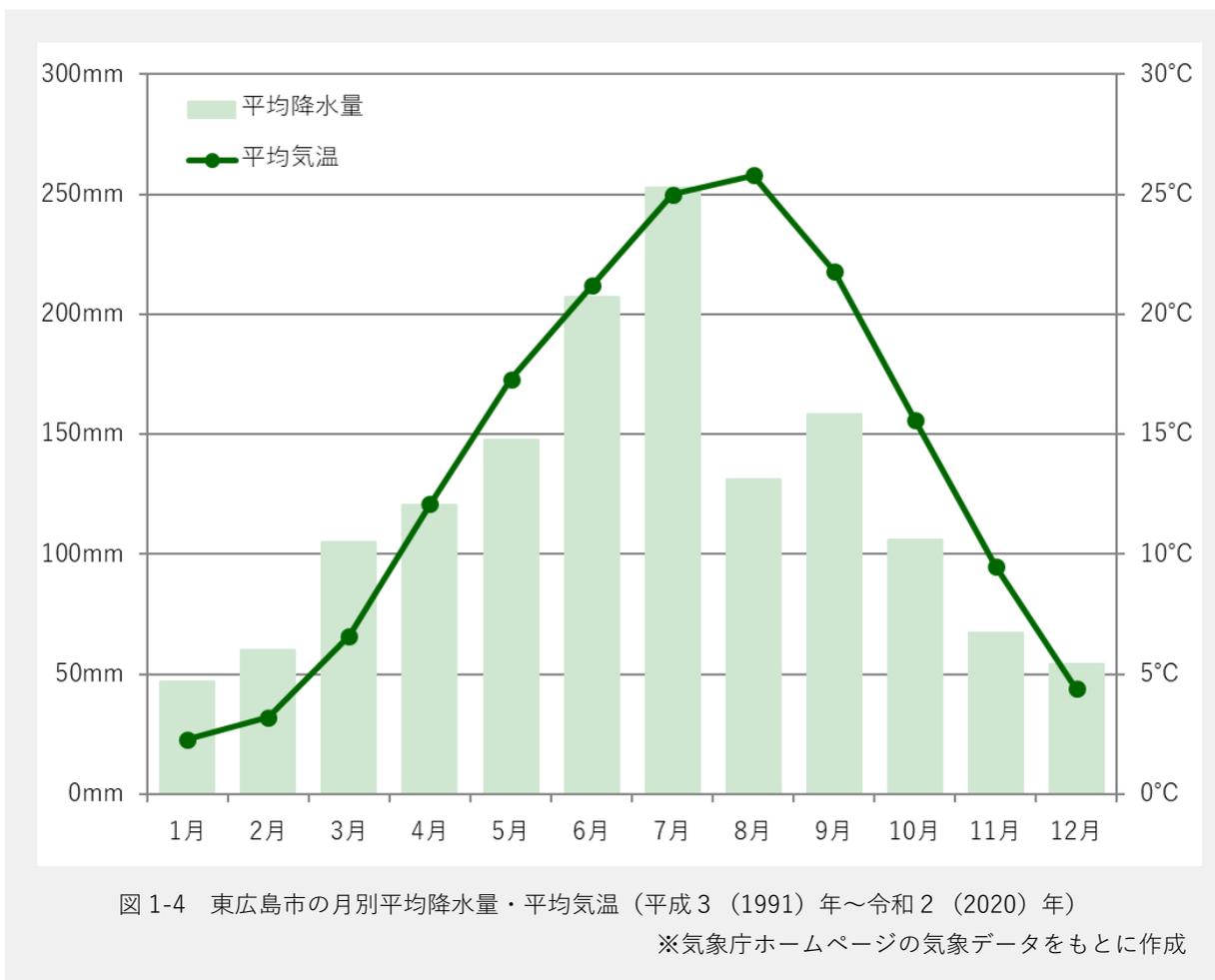


図 1-3 東広島市の地質図（地質調査所「20 万分の 1 地質図幅『広島』」（1986）を一部加工）

● 気候

本市は標高が北に高く南に低い地形のため、地域によって冬季の気温、積雪量に差がみられます。瀬戸内海に面する地域は四季を通じて寒暖の差が少なく、市内でも温暖な気候です。一方、標高の高い地域は平均気温が低く、凍害に強い赤瓦の普及や、酒造りなどに深く関わっています。

本市の年平均気温は 13.7℃で、夏期 8 月の平均最高気温は 31.5℃（過去最高気温は 37℃）、冬期 1 月の平均最低気温は -2.6℃（過去最低気温は -12.6℃）です。年間平均降水量は 1,457.6mm です¹。



● 水系

安芸津町を除く地域は、一級河川太田川、江ノ川、芦田川、二級河川瀬野川、黒瀬川、沼田川、賀茂川の 7 水系に属しており、流域としての一体性はほとんどありません。その中で、旧市（西条町、八本松町、志和町、高屋町）、福富町、豊栄町、河内町を流れる沼田川水系と旧市地域、黒瀬町を流れる黒瀬川水系の流域が大部分を占めています。

¹ いずれも平成 3（1991）年～令和 2（2020）年の気象庁ホームページの気象データによる。

一方、安芸津町は、二級河川の高野川、蛇道川、三津大川、木谷郷川、三畝川の5河川が南北に流れ、それぞれ小規模な水流域を形成しています。

このような状況から河川の水量が少なく、各地に数多くのため池が造成されています。



● 植物相

森林は昭和 60 年代までほぼ全域がアカマツ林に覆われており、その間にコナラ・アラカシ群落、スギ・ヒノキの植林が見られました。しかし、燃料や肥料を得る場として山林が利用されることが少なくなると、雑木や草が茂り、アカマツを圧倒するようになります。さらに、昭和の末期から平成にかけて主に松くい虫の被害により、アカマツ林はほぼ壊滅し、現在は照葉樹と落葉広葉樹が混じり合っています。

また、本市には中小河川に加え、多くのため池が造成されており、水辺の植物が豊富です。特にサイジョウコウホネは西条盆地の固有種として知られており、本市の水生植物を代表するものです。



写真 1-1 サイジョウコウホネ



写真 1-2 鶴亀山の社叢 (県天然記念物)

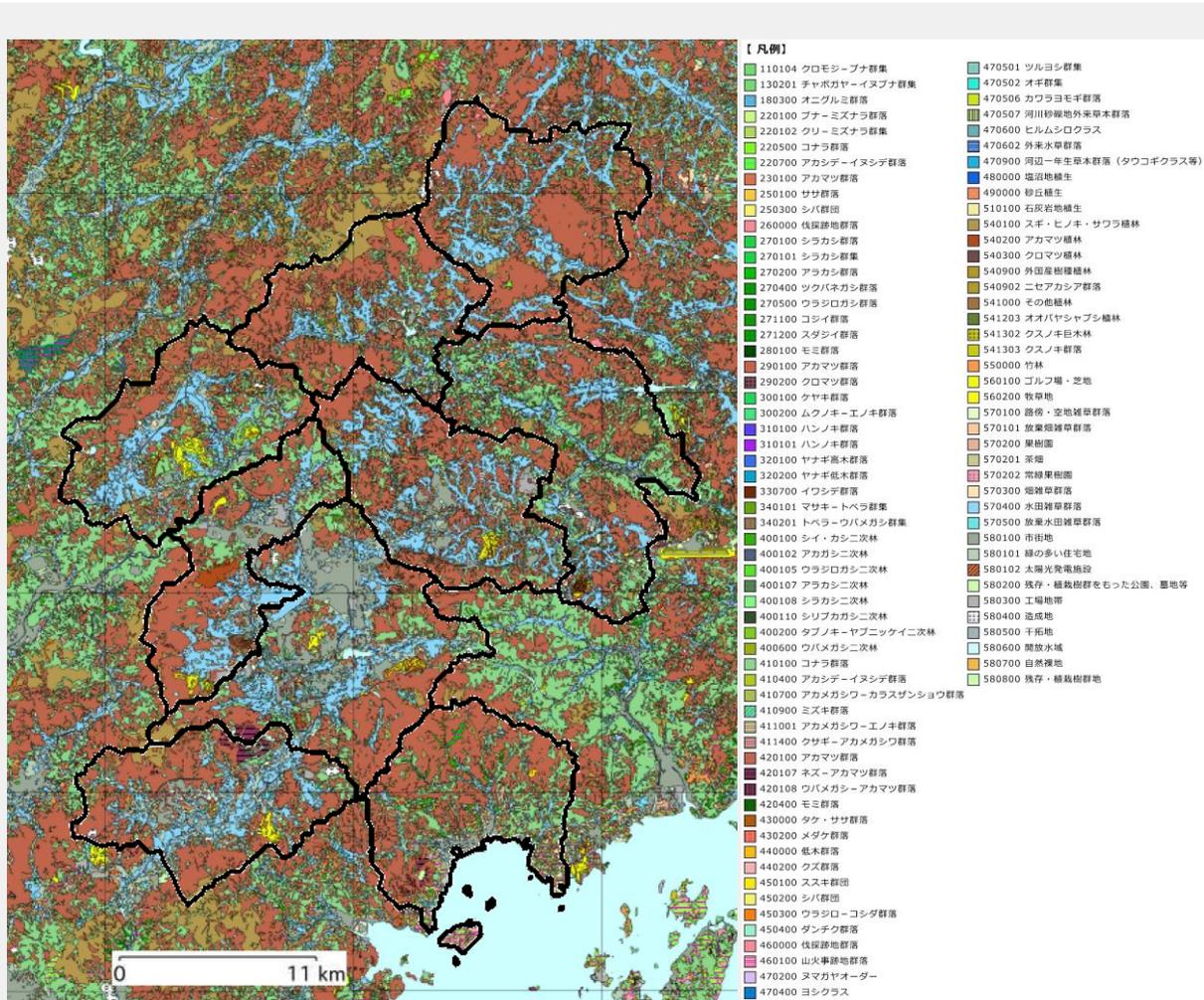


図 1-6 東広島市の植生図 ※環境省自然環境局生物多様性センター自然環境調査 Web-GIS 「植生調査 (1/2.5 万 平成 11 (1999) 年～整備)」より取得一部加工して作成

● 動物相

瀬戸内海沿岸・島しょ部から標高 900mほどの山地に至るまで、多様な環境の下にある本市は動物相も豊かです。大型獣ではイノシシ、シカはもちろん、北部ではクマの報告例も多くあります。小型獣ではキツネ、タヌキ、アナグマ、ウサギ、テン、イタチ、ムササビなどが見られます。また、オオサンショウウオ（特別天然記念物）を始め、アキサンショウウオ（旧：カスミサンショウウオ、市天然記念物）や、アカハライモリ、各種カエル類、などの両生類、マムシ、ヤマカガシ、シマヘビなどの爬虫類も数多く見ることができます。加えて豊かな水辺環境には大型の水辺の鳥が生息しており、近年はコウノトリ（特別天然記念物）の飛来も確認されます。

魚類は海水魚と淡水魚があります。海水魚はスジハゼやアミメハギなどが確認されています。淡水魚は、沼田川水系、太田川水系などで海から川を遡るアユ、ウナギなどを見ることができます。黒瀬川水系はナマズやカワムツ、ドンコ、ハヤなどが生息する一方、海から川を遡る魚類は見られません。



写真 1-3 オオサンショウウオ（特別天然記念物）



写真 1-4 コウノトリ（特別天然記念物）

2. 社会的状況

(1) 人口

令和 7（2025）年 3 月現在の人口は 19 万 363 人です。本市ではこれまで一貫して人口増加が続いてきましたが、わが国全体で少子高齢社会が進展する中、その傾向は緩やかになりつつあります。地区別の人口推移を見ると、市街地を形成する西条町・八本松町は増加傾向にありますが、福富町・豊栄町・河内町・安芸津町では減少傾向が続いており、志和町では平成 7（1995）年、黒瀬町では平成 12（2000）年、高屋町では平成 17（2005）年をピークに減少に転じています。西条町を除く地区では高齢化率が 21%と高く、文化財保護の担い手の確保の面でも大きな影響を及ぼしています。

本市の人口は、長期的には減少傾向に向かうと考えられるものの、まちづくりの効果や近年増加傾向にある外国人市民の影響等を考慮し、今後も緩やかな増加で推移するものと考えられます。本市は令和 12（2030）年における人口を、令和 2（2020）年から約 8,000 人増加の 20 万 5,000 人と推計しています。（令和 2（2020）年国勢調査、第五次東広島市総合計画後期基本計画を参照）

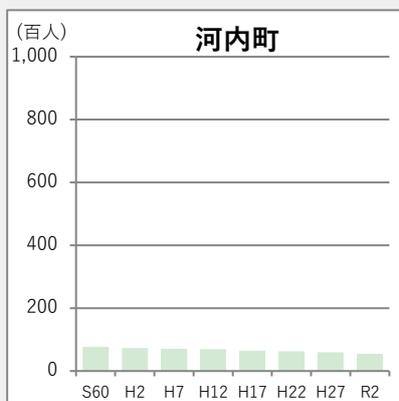
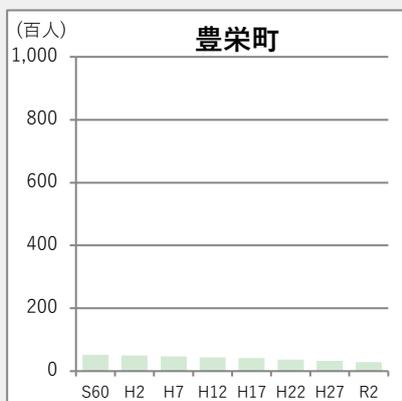
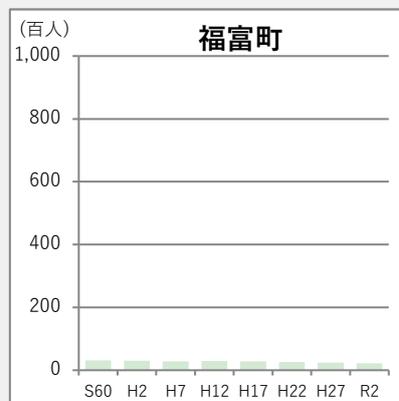
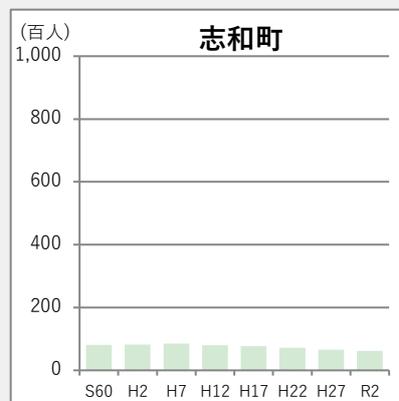
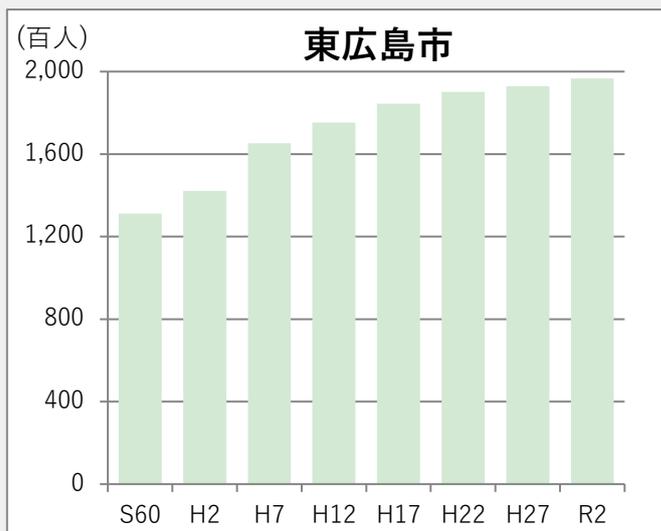


図 1-7 東広島市の人口の推移 ※国勢調査をもとに作成

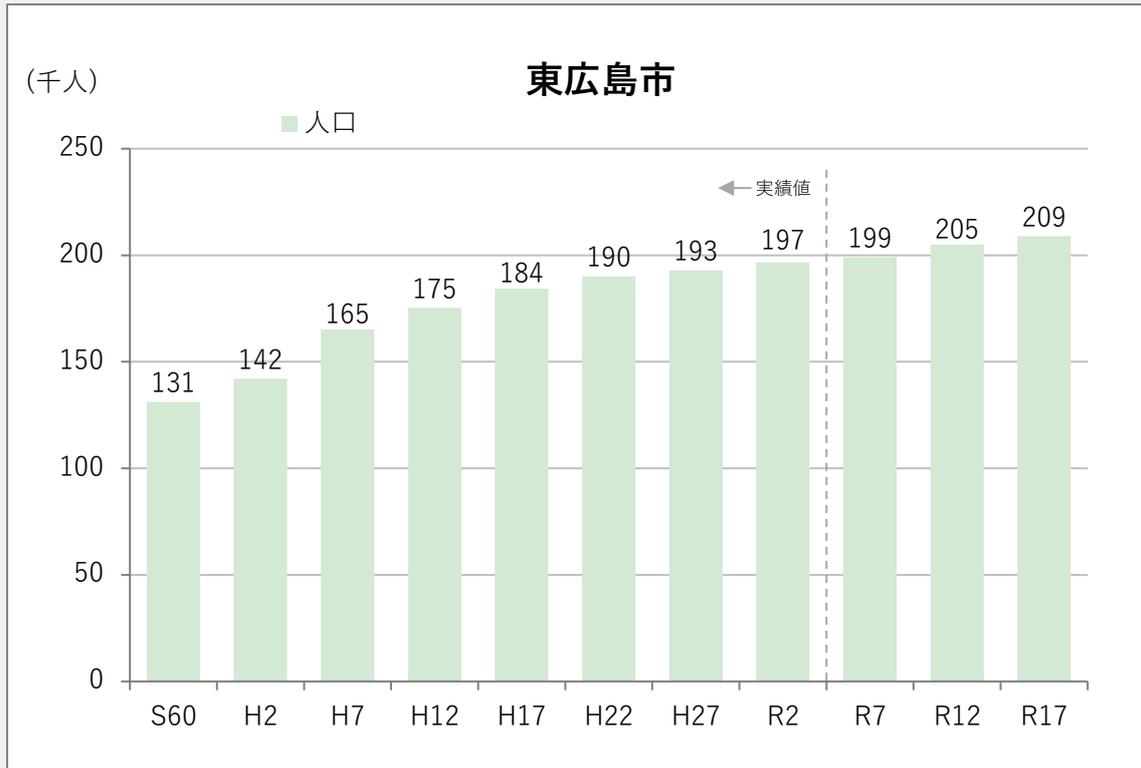


図 1-8 東広島市の人口の推移と将来予測 ※第五次東広島市総合計画後期基本計画をもとに作成

(2) 産業

本市の令和2（2020）年の就業者数は、第1次産業が3,382人（3.6%）、第2次産業が2万7,661人（29.5%）、第3次産業が5万8,898人（62.9%）です。産業別で見ると、製造業が2万2,897人（24.5%）で最も多く、卸売業、小売業が1万2,628人（13.5%）、医療、福祉が1万1,831人（12.6%）と続きます。

また、令和3（2021）年度の総生産は1兆1,843億400万円で、広島県全体の9.8%を占めます。構成比率は第1次産業が40億3,600万円（0.3%）、第2次産業が6,938億5,900万円（58.6%）、第3次産業が4,843億6,200万（40.9%）で、近年第2次産業が増加傾向にあります。特に、本市では電子部品や自動車部品・同附属品が基幹産業に位置付けられています。

第1次産業は、多彩な自然環境下で様々な農林水産業が営まれています。中でも水田面積は県内最大で、西日本有数の稲作地帯を形成するほか、野菜、花き、果樹及び畜産など、気候や地形に応じて多彩な農業が営まれています。

（令和3年度広島県市町民経済計算結果、令和3年度産業連関表の概要、第3次東広島市農業振興基本計画を参照）

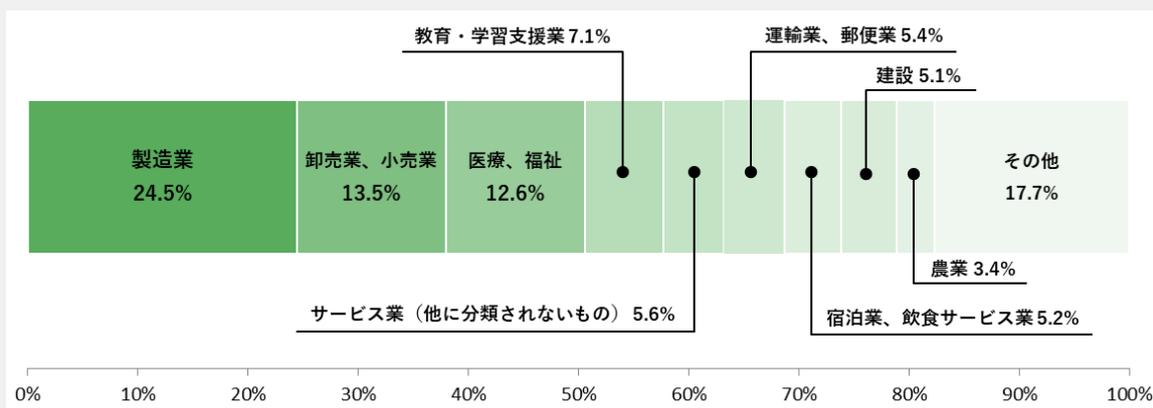


図 1-9 東広島市の産業（大分類）別就業者数（令和 2（2020）年 10 月）

※令和 2（2020）年国勢調査をもとに作成

(3) 観光

本市の観光客数は 367 万 5,000 人（令和 5（2023）年度）で、そのうち外国人観光客数は 1 万 26 人です。新型コロナウイルス感染症の影響により一時観光客数は減少していましたが、令和 4（2022）年度に道の駅西条のん太の酒蔵の開業もあって増加し、令和 5（2023）年度も増加しています。また、外国人観光客数も令和 4（2022）年度の 2,832 人から大きく回復しています。

観光コンテンツの中心は「日本酒」です。JR 西条駅周辺部の徒歩圏内には 7 つの酒蔵が集まり、重要な観光資源です。中でも毎年 10 月に行われる酒まつりは、市の内外から多くの人々が訪れ、例年 2 日間で約 20 万人が来場する最大のイベントです。

一方、歴史・文化財等を目的とした観光客は 8% に留まっており、文化財の観光資源としての活用が今後の課題の 1 つです。

（広島県観光客数の動向、東広島市観光総合戦略、統計でみる東広島 2023 を参照）



写真 1-5 酒まつり



写真 1-6 あかりの散歩道（酒蔵通りライトアップイベント）

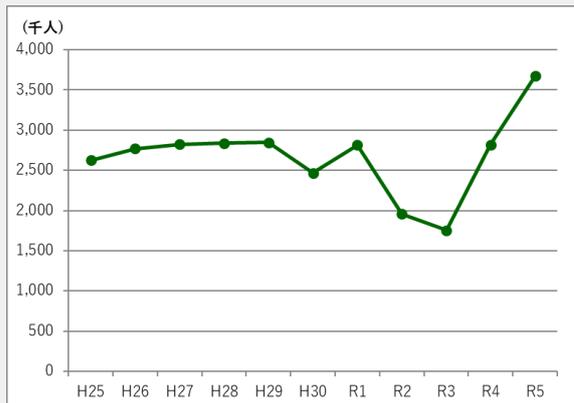


図 1-10 東広島市の総観光客数
※広島県観光客数の動向をもとに作成

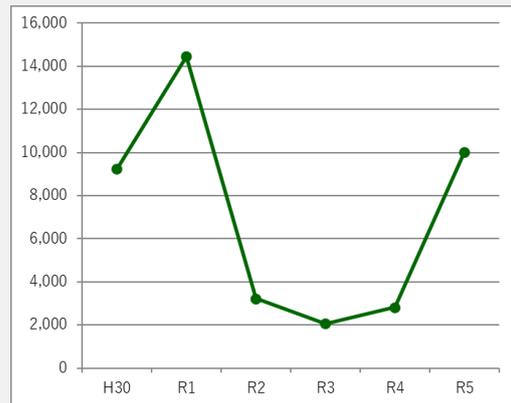


図 1-11 東広島市の外国人観光客数
※広島県観光客数の動向をもとに作成

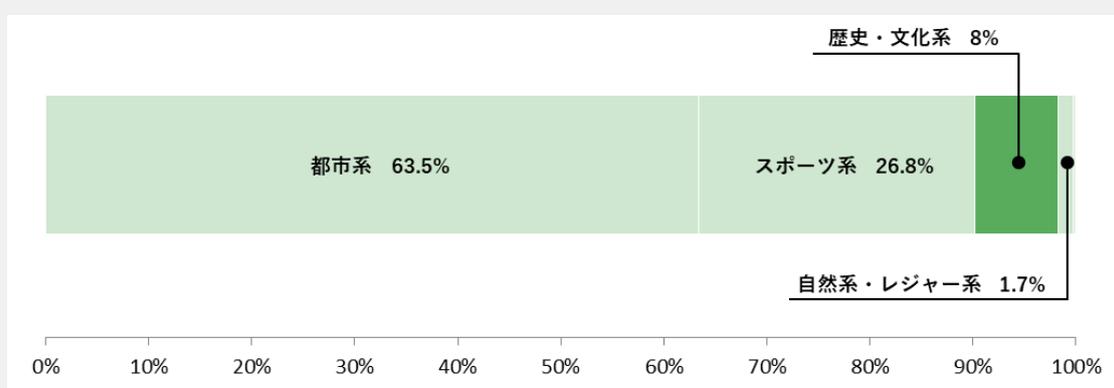


図 1-12 東広島市の観光目的 (令和 4 (2022) 年度)²
※統計でみる東広島 2023 をもとに作成

(4) 交通

本市は広島県の南部、ほぼ中央に位置しており、古代以来、東西交通の要衝^{ようしゅう}でした。また、畿内と九州を結ぶ大動脈である瀬戸内海の地乗り航路に面しており、海上交通でも重要な位置にあります。

現在でも、市の中心部と県内主要都市とは、直線距離でおおむね 60 km 以内の距離にあり、山陽新幹線 (東広島駅)、山陽自動車道 (志和 IC³、西条 IC、河内 IC、高屋 JCT⁴.IC) といった高速交通機関を有するとともに、広島空港にも近接しています。また、東広島・呉自動車道と東広島高田道路の一部が開通し、高屋 JCT.IC に接続しています。

一般国道では、南北に国道 375 号、東西には国道 2 号が貫いています。国道 2 号の慢性的な交通渋滞解消と広域連携の強化を目的として、国道 2 号東広島・安芸バイパスの整備が進められ、

² 都市系…都市観光、産業観光 スポーツ系…ハイキング、登山、キャンプ、その他スポーツ
歴史・文化系…神社、仏閣、祭り、行事、その他 自然系…自然探勝、温泉
レジャー系…海水浴、釣り、潮干狩、みかん狩り、松茸狩り等

³ インターチェンジの略

⁴ ジャンクションの略

令和5（2023）年3月に開通しました。

本市は空路へのアクセスも良く、市の中心部から広島空港まで自動車です約20分（山陽自動車道利用の場合）、鉄道・バス利用です約25分（JR山陽本線西条駅～白市駅、白市駅～広島空港、西条駅～広島空港）と好立地にあります。広島空港からは、令和7（2025）年3月現在、東京（約1時間20分）、札幌（約2時間）のほか、仙台、沖縄、成田の国内定期便、海外へは、大連、北京（大連経由）、上海、台北、香港、バンコク、ソウル、ハノイの国際定期便が就航しており、地方の中心都市にふさわしい空の玄関です。

一方、域内交通は鉄道とバスが代表的です。東西に走る鉄道は内陸部でJR山陽本線、海岸部でJR呉線の2路線があり、山陽本線に7駅、呉線に2駅が設置されています。市域の南北を結ぶ公共交通機関はバスのみですが、過疎化の進行により路線は縮小傾向にあります。その他、志和町、高屋町、黒瀬町、豊栄町、河内町、安芸津町では地域公共交通（コミュニティバス等）が導入されています。

このような状況の中、市民の主な交通手段は自動車であり、国道・県道・市道が市民の生活を支えています。

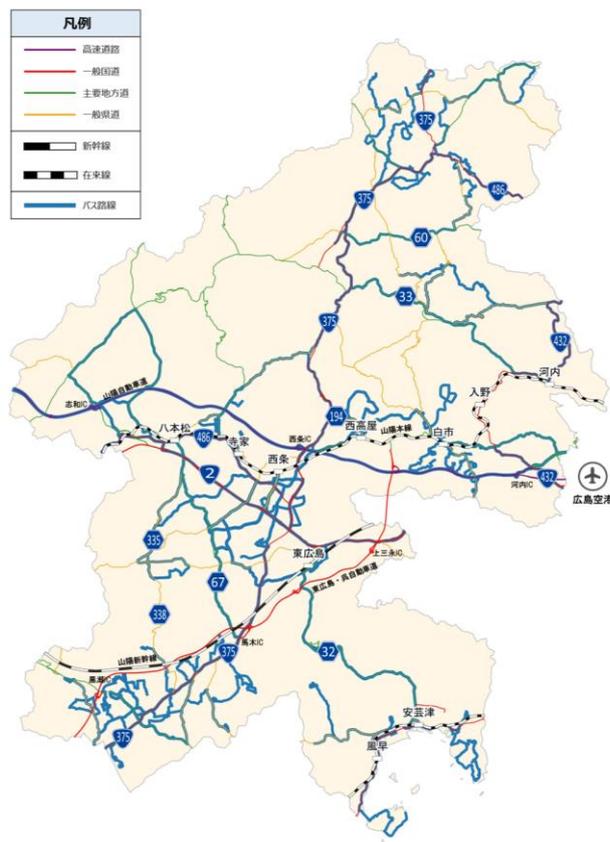


図1-13 東広島市の公共交通
(東広島市都市交通マスタープラン 改定版)

(5) 土地利用

本市の森林面積は60%を超えています。中心部には市街地や工業団地などの都市的土地利用が拡大しており、その市街地を包むように山林や農地が広がっています。

人口密度は、主にJR山陽本線の駅周辺・広島大学付近・黒瀬地域の市街化区域で高く、特に西条駅の周辺では100人/haを超えています。全市域のうち、5.5%の市街化区域及び用途地域の中に、人口の60%近くが居住しており、全体的には集約型の都市構造です。

河内地域・安芸津地域の用途地域や福富地域、豊栄地域は人口密度が比較的lowく、居住地域が分散しているものの、それぞれの地域に一定の人口集積地があります。

(第五次東広島市総合計画を参照)

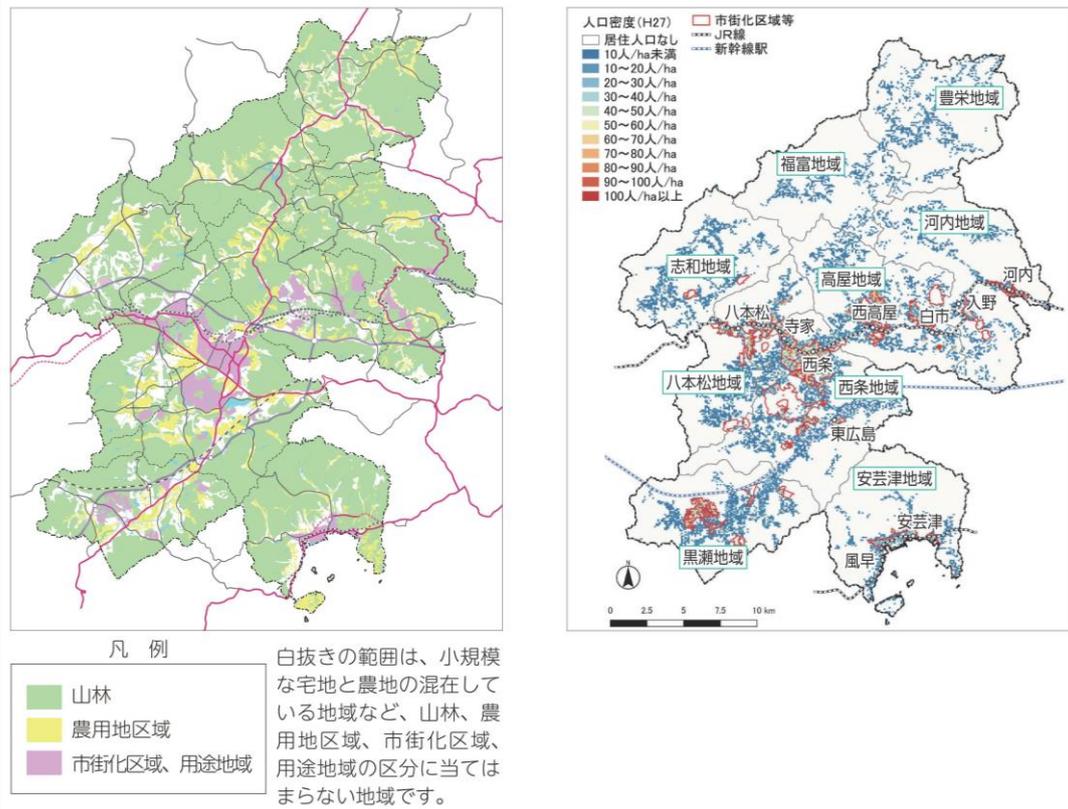


図 1-14 東広島市の土地利用状況図（平成 26（2014）年）及び人口密度（平成 27（2015）年）
（第五次東広島市総合計画）

(6) 文化財に関連する施設

河内町の東広島市出土文化財管理センターは、市内各地の遺跡から出土した文化財を整理・収蔵するとともに、展示機能を併せ持った公立埋蔵文化財センターです。

各地には、市立の歴史民俗資料館（八本松・三永・安芸津）と民俗資料展示室（河内町・豊栄町）があり、市の歴史に関わる民俗資料を収蔵・展示しています。このうち八本松歴史民俗資料館は「産業」、三永歴史民俗資料館は「農村生活」をテーマに民俗資料を展示しています。また、安芸津歴史民俗資料館は、安芸津町の特徴である海と関わりの深い北前船の歴史や、酒造りに科学的手法を導入するとともに、杜氏を育成した三浦仙三郎^{とうじ}に関する文化財等を展示しています。



写真 1-7 出土文化財管理センター



写真 1-8 安芸津歴史民俗資料館

国の重要文化財に指定されている旧木原家住宅と、市の重要文化財に指定されている旧石井家住宅は、市による運営のもと一般公開を行っています。国の史跡に指定されている三ツ城古墳^{みつじょう}は、発掘調査の成果を踏まえて当時の古墳の姿を復元するとともに、周囲を公園として整備しており、史跡を身近に感じられる場所です。付近の管理棟と東広島市立中央図書館のガイダンスコーナーでは、三ツ城古墳や市内の遺跡についての展示を行っています。また、同じく国の史跡である安芸国分寺跡は、現在の國分寺の周辺を安芸国分寺歴史公園として整備するとともに、発掘調査で明らかになった遺構を復元し、歴史学習の場として活用しています。加えて西条酒蔵群^{さいじょうさかぐらぐん}賀茂鶴酒造一号蔵（史跡）の一部である西条本町歴史広場は、西条酒蔵通り地区とその周辺地域の歴史と文化を学ぶことができる多目的広場として整備し、活用しています。

豊栄町の乃美地域センターに併設したオオサンショウウオの宿は、痩せて弱ったオオサンショウウオ（特別天然記念物）の個体やケガを負った個体を保護し、回復させてから放流する一時保護施設として運営するとともに、保護の状況を公開しています。

登録博物館である東広島市立美術館では、国内外の優れた美術作品を紹介する展覧会や現代絵本作家原画展に加え、刀剣に関する特別展や東広島の黎明展など、歴史文化に関する展覧会も開催しています。同じく登録博物館である仙石庭園銘石ミュージアムは日本庭園形式をとり、全国の銘石・巨石・奇石・組石を鑑賞できる民間施設として、運営されています。

その他、東広島市立図書館では郷土資料を保存・公開し、市内各地の生涯学習センター・地域センターでは市民による地域の文化活動が実施されています。

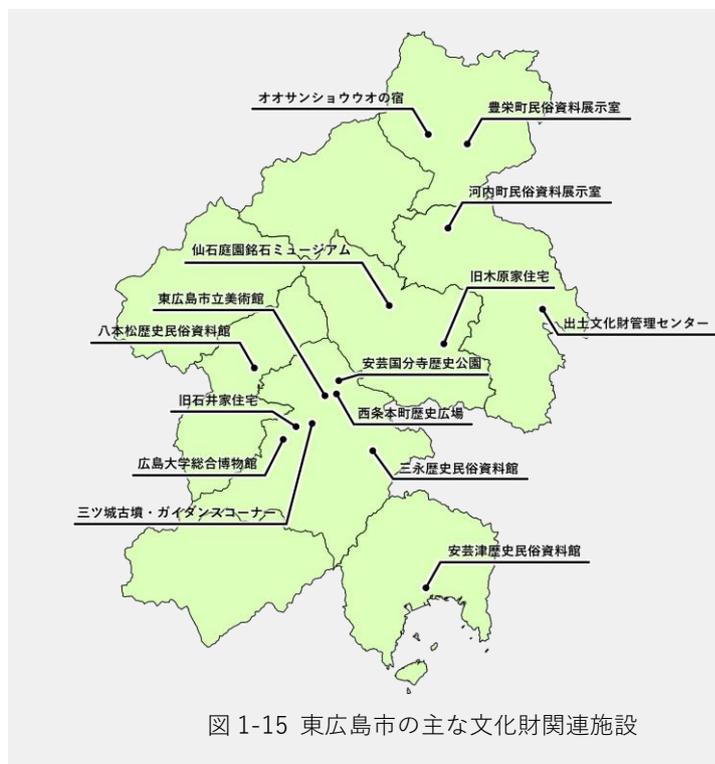


写真 1-9 旧木原家住宅（重要文化財）

写真 1-10 三ツ城古墳ガイダンスコーナー
(東広島市立中央図書館内)

3. 歴史の変遷

(1) 先史

● 旧石器時代～縄文時代

日本列島に人々が住み始めたのは、今から約4万年前と考えられていますが、こうした人々の遺跡が多く発見されるのは約3万年前からです。この時代は後期旧石器時代と呼ばれ、気候は今よりも寒く、朝鮮半島と陸続きでした。人々はナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物を追い、日本列島へやって来たと考えられています。

現在の市域で人類の活動の痕跡が確認できるのも、この後期旧石器時代です。当時の西条盆地は広範囲に湿地が広がっており、現在の広島大学や山陽自動車道西条インターチェンジ付近などのやや標高の高い位置で生活していたと推定されます。人々はそうした環境下で、動物の狩猟や植物の採取を行いながら生活していました。代表的な遺跡が広島大学構内の鴻の巣遺跡^{しゅりょう}で、後期旧石器時代初頭の石器が出土しています。また、近接する西ガガラ遺跡では、後期旧石器時代前半の集落の跡が発見されています。

続く縄文時代は寒かった気候が徐々に暖かくなり、旧石器時代と比べて動植物を豊富に採取できるようになりました。また、土器が発明され、食材を煮炊きし、食べやすくする技術が発達しました。このほか、狩りをするための石器、魚を捕らえるためのモリや釣針などが発達します。市域のこの時代の遺跡は、小さな集落がわずかに見られる程度で⁵、人口もあまり多くなかったと考えられています。



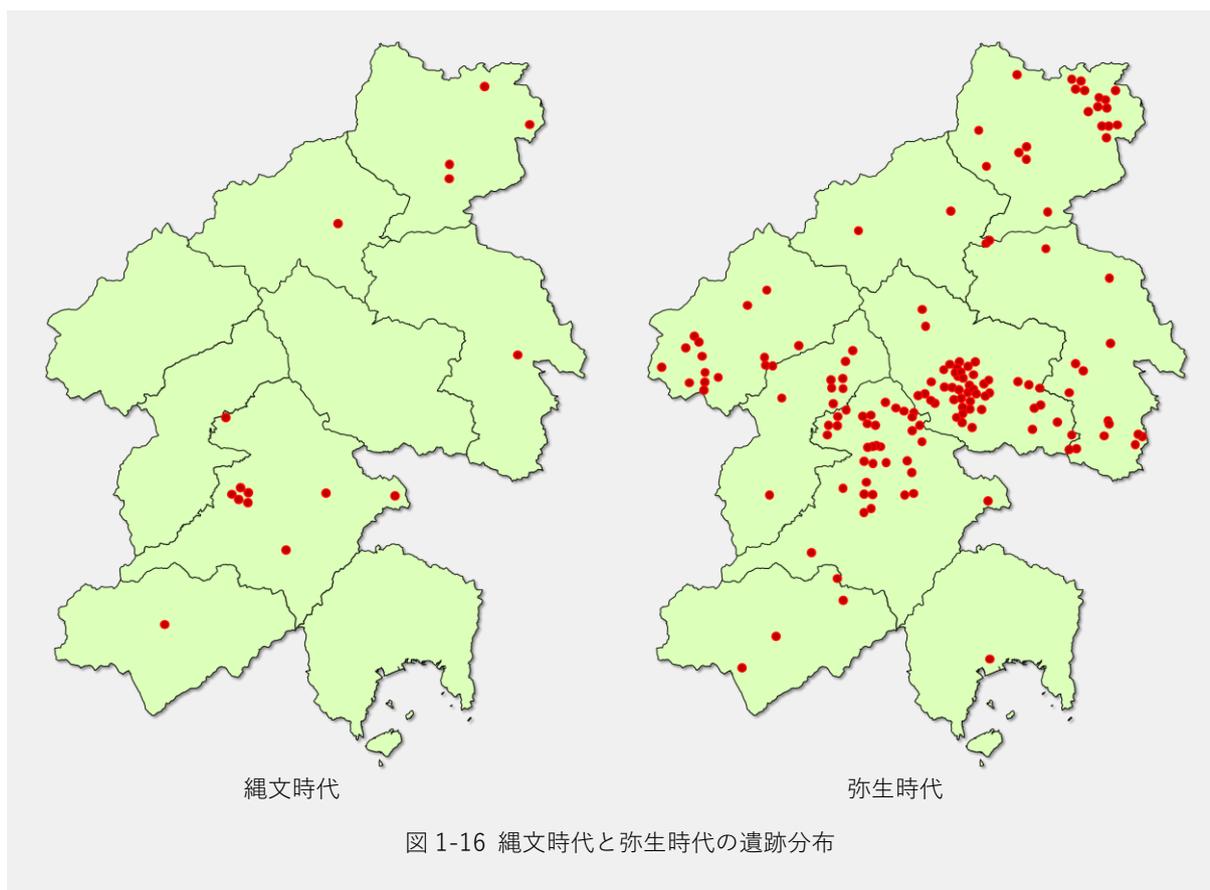
写真 1-11 西ガガラ遺跡の集落跡

● 弥生時代

弥生時代に入ると、市域では徐々に人口が増え、後期をピークに爆発的に遺跡数が増加します。弥生時代は大陸から稲作が伝わり、導入された時代で、本格的に米作りが行われました。西条町下見の黄幡1号遺跡^{おうばん}からは、これを裏付ける鍬や鋤などの木製品^{すき くわ}が出土しています。また、瀬戸内海沿岸部で廃棄された船の部材を水路（木樋）に再利用したと思われる出土品もあり、他地域との物資の交流が始まっていたと考えられます。

一方で、次第に物資をめぐる争いが起こるようになりました。弥生時代中期からは集落を守るため、丘陵^{きゅうりょうじょう}上に規模の小さい集落を設ける、あるいは堀を巡らせた規模の大きい環濠集落^{かんごう}を低地に設けるようになりました。

⁵ 戸鼻遺跡、西ガガラ遺跡、和田平遺跡、上泓遺跡など



● 古墳時代

古墳時代に市域にも多くの古墳が造られ、市内で約 700 基前後の古墳が確認されています。古墳は地域の有力者（首長）の墓と考えられており、市内で最も古い古墳は4世紀の初めと推定されています⁶。

4世紀末から5世紀初めには、市域に安芸地方全体に影響力を持つ豪族が現れたと考えられており、丸山神社古墳群や長者スクモ塚古墳群などの規模の大きな古墳が確認されています。それ

⁶ さいがきこ たてあなしき
才ヶ迫第1号古墳。竪穴式石室2基を持つ。

に続き、5世紀前半、西条中央に三ツ城古墳群（三ツ城古墳（史跡））が形成されました。そのうち三ツ城第1号古墳は、全長約92mの広島県最大級の前方後円墳です。前方後円墳は、当時のヤマト政権と地域の有力者の深いつながりを示したものであり、三ツ城第1号古墳はその規模から安芸地方最大の大豪族の墓と考えられています。

しかし、それ以降、大型の前方後円墳はこの地域に見られなくなり、安芸地方全体に影響力を持つ豪族は見られなくなると推測されます。



写真 1-14 長者スクモ塚第1号古墳の埋葬施設



写真 1-15 三ツ城古墳（史跡）

(2) 古代

● 飛鳥時代

7世紀中期から、日本は中央集権国家へと歩みを進めました。土地と人民は原則として天皇のものとし、人民を戸籍で管理し、田を与えて耕作させ、税を徴収する体制が目指されました。

その中で天武5（676）年、天武天皇は飢饉や疫病などの災厄を祓うための儀式である「諸国大祓」を、全国で実施するよう命じました。天皇の命令を受けた安芸国（現在の広島県西部）の官人の国造と評造は、儀式に必要な物資を地域から集め、神殿で「諸国大祓」を行ったと考えられています。この神殿推定地が、高屋町大畠にある西本6号遺跡（市史跡）です。遺跡からは大規模な神殿と思われる跡⁷と、「解除」と墨書きのある須恵器や、儀式で使ったと思われる特殊な遺物等⁸が出土しています。

⁷ 二重の溝によって約90m×80mの方形に区分された空間の中に、独立棟持柱をもつ掘立柱建物跡と大型の四面庇建物など、8棟の掘立柱建物群が発見された。

⁸ 毛彫馬具など



写真 1-16 西本 6 号遺跡 (市史跡)



写真 1-17 西本 6 号遺跡出土品 (市重要文化財)

● 奈良時代

奈良時代の日本は国一郡一里(郷)の単位に分けられおり、市域は主に安芸国の賀茂郡と豊田郡あきのくに かもぐん とよたぐんに含まれ、一部は備後国世羅郡びんごのくに せらぐんに属していました。人々は国から口分田くぶんでんと呼ばれる田を支給され、納税の義務を負いました。

奈良時代の西条地域は、安芸国の宗教の拠点でした。天平13(741)年に聖武天皇が全国に国分寺(国分僧寺)の建立を命じ、安芸国では西条盆地の北側(西条町吉行)に国分寺が造営されました。安芸国分寺跡(史跡)からは、「天平勝寶二年」(750年)と書かれた木簡や、「安居」⁹や「齋会」¹⁰など宗教行事の名称が書かれた須恵器が出土しており(広島県安芸国分寺跡土坑出土品(重要文化財))、750年前後には主要な施設(伽藍)が造られていたことが明らかになっています。

一方、国分寺の東に「尼寺」という地名が残っており、天平13(741)年に全国で建立を命じられた国分尼寺こくぶん にしが存在した可能性が推定されます。また、国分寺の近くには、各国の政治の中心施設である国府が置かれることが多く、市域にも国府が置かれた可能性が推定されますが、いずれもそれを証明する遺構は確認されていません。

このほか、畿内と九州の大宰府を結ぶ古代山陽道が現在の西条町～八本松町を東西に通っていたことが推定されていますが、その正確なルートは確認されていません。



写真 1-18 安芸国分寺跡 (史跡)



写真 1-19 「安居」の墨書土器と「天平勝寶二年」と書かれた木簡

⁹ 毎年4月15日から、僧が一定期間お寺から出ずに行う夏季の修行

¹⁰ 僧尼を集めて齋食を供する法会

● 平安時代

平安時代には戸籍をもとに人に課税する仕組みから、土地を単位に課税する仕組みに税制が転換されていきました。その中で、国司（諸国を治める役人）が支配管轄する公領（国衙領）と、貴族や大寺院などが私的所有を認められた荘園が併存しました。市域では「志芳荘（志和町）」、「高屋保（高屋町）」、「造果保（高屋町）」、「久芳保（福富町）」、「沼田新荘（河内町）」などが見られます。

また、11～12世紀中頃までに、西条盆地は現在のJ R西条駅西側を流れる半尾川を境界として東条郷（西条町・黒瀬町）と西条郷（西条町・八本松町）に分けられており、両郷は安芸国の国衙領であったことが知られています。

(3) 中世

● 鎌倉時代

鎌倉時代には、この地域の荘園等の地頭として任じられた鎌倉武士が、荘園を管理する代官を派遣していました。その中には、南北朝・室町時代にこの地域で勢力を拡大する平賀氏や天野氏がいきました。平賀氏は出羽国平鹿郡（秋田県）に、天野氏は伊豆国田方郡天野郷（静岡県）にルーツを持ちます。彼らは13世紀後期の蒙古襲来後に、この地域に移住・定着しました。

● 南北朝・室町時代

南北朝時代に入ると、東条・西条を中心とした地域は東西条と呼ばれるようになり、山口を本拠として中国地方の西部から九州の北部に大きな勢力を持った大名の大内氏の所領になりました。東西条は安芸国でも有数の穀倉地帯であり、山陽道も通る重要な地域でした。大内氏が安芸国で勢力を拡大していくと、東西条の範囲も拡大し、豊栄町の一部を除く市域の大部分と呉市域の一部、熊野町域にまで広がりました。一方、東西条に含まれなかった高屋保（高屋町）・造果保（高屋町）は現地の有力者である平賀氏が、志芳荘（志和町）は同じく現地の有力者である天野氏が治めました。西条盆地を巡っては大内・細川・尼子氏ら大名による攻防が繰り返され、当時の政治的・軍事的な様子が分かる城跡が多く遺っています。

代表的な城跡に鏡山城跡（史跡）があります。これは大内氏が安芸国の拠点として築いたもので、細川氏や尼子氏との対決の場になりました。大内氏の拠点はその後、榎城（曾場）城跡（市史跡）、榎山城（榎山城跡（市史跡））へと移っていききました。



写真 1-20 鏡山城跡（史跡）



写真 1-21 榎山城跡（市史跡）

大内氏滅亡後、当地域は毛利氏の領国に組み込まれました。

(4) 近世

● 江戸時代

江戸時代に入ると、安芸国は福島氏を藩主とする広島藩となりました。市域は広島藩の中の賀茂郡・豊田郡・世羅郡に属しました。

当時の江戸幕府が交通整備に取り組む中、市域には西国街道と呼ばれる現在の大阪と北九州を結ぶ重要な街道が通っており、JR 西条駅前の四日市（西条本町周辺）に宿場町が整備されました。街道の道幅は約2間半（約4.5m）、^{りどう}里道は3尺（約91cm）に整備され、大名や幕府の役人等の宿泊施設である御茶屋（本陣）、^{おちや}本陣の予備施設の脇本陣、賀茂郡の郡役所等が置かれました。加えて、一般の通行者を対象とした宿泊施設である^{はたご}旅籠、次の宿場町まで荷物を運ぶ^{ひきやく}飛脚や^{てんま}伝馬15匹が配置され、地元の人々の負担のもと運営されました。御茶屋は広島藩でも最大規模で、四日市は広島藩の陸上交通の重要な拠点となっていきました。かつて四日市のあった西条酒蔵通り地区（西条本町）には、宿場町の特徴である南北に細長い土地の形（^{じわり}地割）が現在も多く^{のこ}遺っています。また、^{しらいち}白市村（高屋町白市）も広島藩の北部と竹原をつなぐ交通の^{ようしょう}要衝で、地域経済の中心である^{ざいまち}在町¹¹として栄えました。



写真 1-22 西条酒蔵通り地区の^{じわり}地割（四日市遺跡）



写真 1-23 ^{おちや}御茶屋（本陣）跡

海上交通は、江戸時代、三津村（安芸津町）に設置された^{おくらしよ}御蔵所に、賀茂郡や豊田郡で収穫された年貢米が集められ、船で広島や大坂（大阪）まで輸送されました。なお、四日市は広島藩の北部とこの三津をつなぐ中継地としての役割も担っていました。『芸藩通志』によれば、木谷村は最大1,590石積の船を有する広島藩でも有数の^{かいせん}廻船の拠点で、廻船業者は幕府の^{ごじょうまい}御城米や大名

¹¹ 地域の経済的な中心地として広島藩が公認した町。ただし、郡奉行の管轄下にあり、村として扱われた。市域では賀茂郡の四日市・白市・三津が該当する（久下実「広島藩」）。

の藩米の輸送を行ったほか、日本海沿岸部で物の売り買いを行ういわゆる“北前船”^{きたまえぶね}で財をなしました。

農業について見ると、江戸時代を通じて、賀茂郡・豊田郡は広島藩の中で最大規模の穀倉地帯であったことが、広島藩の地誌である『芸藩通志』で明らかになっています。一方、沿岸部の豊田郡木谷村では元禄年間（1688年～1704年）に塩田が設けられ、塩づくりが盛んでした（二馬手塩田跡 樋の輪（市史跡））。

酒造業では、三津（安芸津町）の菅家^{かん}が天正6（1578）年の創業を伝えています。当時の三津は広島・三原・尾道・竹原に次ぐ酒造地でした。一方、西条では延宝年間（1673年～1681年）に始まると伝えられていますが、四日市宿での需要を満たす程度の小規模なものであり、その他の地域も同様でした。

幕末には政治的混乱に対応するため、広島藩の隠れ城である八条原城や、藩の諸隊である神機隊の駐屯地が、志和地域に設けられました。

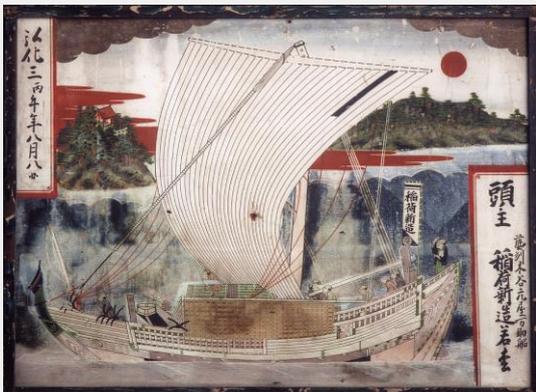


写真 1-24 木谷村の廻船業者・元屋の船が描かれた絵馬
※みくに龍翔館(福井県坂井市)所蔵



写真 1-25 二馬手塩田跡 樋の輪（市史跡）

(5) 近代

● 明治時代～昭和時代（戦前）

近代の日本は、明治新政府による天皇を中心とした中央集権国家が目指されました。明治4（1871）年の廃藩置県によって広島藩は広島県となり、明治22（1889）年の市町村制施行により、江戸時代の市域に89あった村から（『芸藩通志』）、34の村が成立しました。明治23（1890）年には、四日市次郎丸村が町制施行により西条町、明治26（1893）年には三津村が三津町、大正13（1924）には大河村^{おおかわ}が河内町になりました。

酒造業では、三津の三浦仙三郎^{みうらせんざぶろう}が、科学的な手法を取り入れた酒造りを開発し、杜氏^{とうじ}を養成して全国の品評会で好成績を上げました。また、西条でも明治27（1894）年に山陽鉄道が開通し、三浦の醸造技術を習得した広島杜氏や佐竹製作所（現：株式会社サタケ）の開発した動力式精米機・^{たてがた}型精米機等の技術革新により、多くの蔵が建ち並ぶ酒造業の一大中心地になりました。そ

の景観は現在も良好に遺されています（西条酒蔵群）。



写真 1-26 三浦仙三郎



写真 1-27 西条酒蔵群 白牡丹酒造延宝蔵・旧広島県醸造試験場（史跡）

鉄道では、上記の山陽鉄道の開通に続き、呉・三原間の三呉線（現在の呉線）が計画され、昭和 10（1935）年に全線が開通しました。

太平洋戦争が開戦すると、様々な影響が市域にも及びました。昭和 17（1942）年、鎮守府が置かれ海軍の重要な拠点であった呉市の水を確保するため、下三永村（西条町）に水源地が建設されたほか、川上村（八本松町）に弾薬庫が建設されました。また、昭和 18（1943）年、三井造船株式会社の造船所を誘致する中で、その受け皿として賀茂郡三津町、同早田原村、豊田郡木谷村の 3 町村が合併して安芸津町が誕生しました。三井造船株式会社の安芸津造船所は昭和 21（1946）年を完成予定とし、急ピッチで建設が進み、昭和 20（1945）年には 1 号船を進水させましたが、終戦により閉鎖されました。

(6) 現代

● 昭和時代（戦後）～現代

太平洋戦争での市域への空襲の被害も少なく、戦後の復興は他地域よりも早く進みましたが、農業を基幹産業としており、高度経済成長期にも大きな変化は見られませんでした。

昭和の大合併等により、市域では昭和 24（1949）年～昭和 31（1956）年に豊栄町、高屋町、黒瀬町、福富町、志和町、八本松町が成立します。また、昭和 30（1955）年、豊田郡北部を賀茂郡に、賀茂郡沿海部東部を豊田郡に編入する案が県議会で可決され、同年施行されました。これにより、豊田郡の福富町・豊栄町・河内町は賀茂郡に、賀茂郡の安芸津町は豊田郡に編成されました。

昭和 49（1974）年、広島大学の総合移転の候補地であった西条町を中心に八本松町・志和町・高屋町の 4 町が合併して東広島市が誕生しました。その後、昭和 57（1982）年以降は、上記の賀茂学園都市建設に加えて広島中央テクノポリス建設のプロジェクトも加わり、産業基盤、都市基盤、高速交通網、生活基盤の整備がさらに進みました。また、近畿大学工学部も設置されました。

そして、平成 17（2005）年 2 月に東広島市・黒瀬町・福富町・豊栄町・河内町・安芸津町の
1 市 5 町が合併し、現在の東広島市となりました。